

〔書評〕

日本の結晶学
—その歴史的展望—

(1989年1月 日本結晶学会発刊 全461ページ)

昨年の結晶学会年会の受付に置いてあったこの本の校正刷りを手にした時、よくもこれだけ多くの人達が協力し、よくもこれだけ詳しく調べ挙げたものだと感心したが、今回製本されたものを手にして改めてその感を強くした。桜井編集委員長の序によれば、故渡辺得之助先生が言い出しっぺで、「日本の結晶学（特に回折結晶学）の歴史の源流（西川先生）まで遡って語れる語り部が消えないうちにそれを文字に残さねばならない」という動機で、3年半を費やしてこの本は作られたそうである。その最後の語り部であった渡辺先生が、完成1箇月前にご自分の大役を果たされて他界されたこともこの本に劇的な要素を付け加えている。

全著者数90名、掲載された人名は1500に上る回折結晶学仲間の自分史（桜井委員長の弁）であるため、実に多くの材料が盛り込まれており、貴重な資料集となるであろう。全体は大きく4部に分かれており、まず、この本の半分を占める第I部では自然科学の広い分野の底流をなす「結晶学の発展」を9章にわたって紹介している。主に第1, 2章が知っている人が少なくなりつつある創世記の語り部に当たるが、結晶学そのものとX線・電子線・中性子線回折の誕生とそれらの幼年～青年期を記録してある。第3～6章では化学・物理・鉱物・生物の結晶学界を構成する4大分野における発展を、第8章では結晶成長・結晶素子・超微粒子・表面といった結晶学の多様な発展について触れている。そして、第7, 9章は回折結晶学発展の駆動力になった技術的進歩の歴史（発生装置・回折計・計算機など）について振り返っているが、企業の果たした役割についての紹介はユニークであろう。第II部「結晶学を育てた組織」では、17の主要大学（第1章）、10の主要研究所（第2章）での活動記録の詳細が紹介されており、人の時間・空間相関（人脈）を知ることができる。また、学会・委員会活動（第3章）、外国との交流（第4章）についても詳述してあるが、一つの学問分野が発展し成人に達すると、権利と共に義務も生じる様子がうかがえて興味深い。第III部は故仁田勇先生の著書の表題から取った「流れの中に」と題し、西川・菊池・仁田・藤原・伊藤先生のむかし話（第1章）と14人の故人の思い出（第2章）から成っている。そして、最後の第IV部には各種年表・書籍リスト・思い出の写真・人名索引など豊富な資料を掲載してある。

この本はよくありがちな何周年記念事業として学会の歴史を残すという形式張った発想ではなく（ちなみに日本結晶学会創立は1950年）、語り部がいなくならないうちに書き留めておくという比較的自由的な発想に基づいているため、臨場感にあふれ読み手を引き込む個所が随所にある。このような独特で魅力ある本を出版された日本結晶学会、ならびに膨大な作業を手弁当で行なわれた関係各位に敬意を表す。なお、この本は当日本放射光学会が寄贈を受けた最初の本であることを付け加えておきたい。

(藤井保彦)